

地域主義と生命系に立脚した経済の実現に向けて

丸山真人

〔要旨〕

1970年代半ばから1980年代半ばにかけての10年間は、ケインズ主義から新自由主義への移行期であった。日本では、玉野井芳郎をはじめとする異端の経済学者たちが、市場社会と工業原理を中心に据えた近代的な経済モデルに代えて、地域主義（regionalism）と生命系（living system）を主軸とする新たな経済モデルを提唱した。それから四半世紀後の今日、グローバリズムの潮流は市場と工業の世界をますます押し広げようとしている。それとともに、生活の安定性・持続性を破壊する市場原理主義への疑問はますます強くなってきている。玉野井たちの提唱した経済モデルは、可能性の世界を描いたものだったが、いまや切実に求められる現実モデルになりつつある。

〔自己紹介〕

1954年三重県生まれ。1978年東京大学経済学部卒業。同年、東京大学大学院経済学研究科進学。1984年から88年までカナダ・ヨーク大学(York University)に留学してカール・ポランニー(Karl Polanyi)について研究。1988年から92年まで明治学院大学国際学部に勤務。1992年に東京大学教養学部の教員となる。現在は、東京大学大学院総合文化研究科教授。大学院「人間の安全保障プログラム」運営委員長を務める。主要業績として、松原望・丸山真人編『アジア太平洋環境の新視点』彩流社、2005、山脇直司・丸山真人・柴田寿子編『グローバル化の行方』新世社、2004、Hiroshi Shibuya, Makoto Maruyama, Masamitsu Yasaka eds., Japanese Economy and Society under Pax-Americana, 東大出版会、2002、など。